

な日本人であったのです。

工兵は作戦軍の舞台作り

和歌山県 森 口 正 一

―守口さんは工兵だそうですが、現役ですか。相当体力があると思うが戦地はどこへ行かれましたか。

私は、昭和十七年二月一日入隊、中部第二九部隊（高槻の工兵連隊）ですが、近くのお寺の常見寺に十日ぐらい泊まりました。その間訓練はなかった。全員で二百三十人のうち「幹部候補生や青年学校卒は前へでろ」と言われ、その人に小銃と実包（実弾）二十発渡されました。

二月十日ごろ、駅から広島―宇品―中国の呉瀨へ直行ですが、慣れないのに甲板衛兵に立ってフラフラ、一ぺんに船酔いしてしまっただ。まあ、二度と九州の山をみることはないだろうと感じました。我々は子供のころからそういう風に教育されていたのかも知れませんが「战友」という歌が実感で、心にしみりました。

―幾日ぐらいかかりましたか、また勤務地はどこでしたか。

四日目の朝ぐらい呉瀨港へ、三日目ぐらいから海が黄色くなった。もう揚子江にはいっていた。河幅が広いので対岸がかすかにみえるぐらい。上陸して行軍で上海兵站宿舎へはいった。街ではシンガポール陥落の花電車が走っていた。

―船には何人ぐらい乗っていたのですか。

他の部隊と合同だった。七千屯の貨物船だったが何人かな。船団は三隻で、私の船はまんなかだったが、前後の船がみえかくれするほどのしげだった。

―初年兵教育は、工兵隊の訓練は相当きびしいと聞いていますが。

初年兵の受領に第一中隊では、将校一、下士官五、六人（工兵隊一個連隊の各中隊毎）ぐらい来ていた。

私は体は頑丈でなかった。入管まで川西航空に勤務していたので、まさか工兵隊とは思わなかった。工兵隊は職人関係、大工や左官が多かった。こんな体でもつかと心配しました。

上海から船で揚子江で蘆山の横を通って南昌へ。その
の工兵第三十四連隊（樁部隊）に転属して、そこで初年
兵教育を受けたのです。

工兵の初年兵教育は人間あつかいしてくれぬ。まず土
工、重材料の運搬、漕船、爆破練習。どれも命がけ。重
材料はほとんど丸太でした。それは架橋にそなえてであ
る。初年兵教育では折りたたみ船はぜんぜんなしで、鉄
舟ばかりでした。

—鉄舟は泛水してあるのですか。

鉄舟置場に立ててあるのを、河へかついで行く。四人
でかつぐが一人あたり六十五〜七〇キロの加重がかかる
と思う。かつぐ人は背の高さ（身長）で揃える。

私にとっては土工と重材料運搬が一番つらい。土工は
穴ほりです。体力のある者は一立方メートルの各個掩体
を掘る。土質にもよるが三十五分、私は五十分から一時
間にかかる。農家の人とか、土工やった人は馴れている
が、私はそんな経験はないので重労働できつかった。

初年兵教育中、同年兵（第一中隊）で一人は自殺、一
人は逃亡した。「辛さを証明してくれたなあ」と自分なり

に思いました。逃亡した人は行方不明。南昌といえども
一步ふみ出せば敵地ですから。小さい河一つ向こう岸に
敵の歩哨がいた。

南昌には飛行機で戦死した南郷少佐の記念碑が建って
いた。初年兵教育は約四か月だが、検閲前に浙贛作戦が
始まり、一期の検閲は受けていない。

—工兵の教育訓練中のようすを話してください。

教育中漕舟行軍があった。四キロ漕ぎあがり、舟を陸
へ揚げて、それをかついで部隊にもどる。途中、部隊へ
四〜五百メートルぐらいになると、「早がけ」となる。体
力ある者は早く進むが、体力無い者は「なみ足」となる。
かけられないものね。すると、うしろから心身鍛練棒
（樗や青竹）でなぐられる。青竹の方は割れてしまうから
よかった。早くついた者は休んでいるが。

重材料運搬のとき、教育助手の上等兵が「おろせ」の
号令がないと、そのままかついでいなければならぬ。
「おろす用意」「腕に」「オーケ」（置け）の命令ではじめ
ておろすのだ。

ある時、私か前方左角をかついでいたら、あとから押

されたおれて、鉄舟の下敷きになった。その時胸を打ったというより、気を失ってしまった。ぜんぜんわからず、気がついたら寝台のうえに寝かされていた。

その後は休まなかった。練兵休をとると、またたかれるので「大丈夫です」と頑張ってきていた。

―浙贛作戦の話が出ましたが、その時出動したのですか。

教育中の十七年四月に東京空襲をしたB25（ノースアメリカン）双発爆撃機が贛江の中州へ不時着した。形はそのままでしたが、くわしいことはわからないが、あとで聞くと、パラシュートでおいた飛行士がつかまって師団司令部へ引っぱっていかれたという。

その時、非常呼集で漕舟するから地下足袋をはけといわれた。折畳舟で司令部の人たちをおおぜい中州へ渡しました。

私は浙贛作戦に出発して、南昌の向こうの河を渡って三日目ぐらいでしたか。入院も出来ず、医務室で薬だけもらって、留守部隊の勤務ばかり。

その頃、贛江に千二百キロメートルの橋も掛けるため

工兵隊が準備をしていたので、兩岸分哨と工兵の上番、下番で休めない。仮眠のみで休むどころでない。ほとんど寝られなかった。

浙贛作戦が終わって皆が帰って来てから、分哨に出たが、原因はわからなかったがなにも食べられない。かげで下給品等を戦友にやった。皆腹をすかしてガツガツしているのに捨てるわけにもいかないの。

それが分哨長にみづかり、勤務は一週間の予定だったが、四〇五目目に「帰れ」と言われ、仮眠も出来ないほど勤務があり休めない。だから「隊へ帰るか」と言われたが「下番まで頑張ります」と言った。帰れば古参兵にどつかれるので「頑張る」と言っていた。しかし、その時の分哨長は召集の古い下士官で、下番するなり、「私の命令だ」と医務室へ連れていかれ診察を受けたら、即日入院です。毎日熱が出て、分哨長は「なぜここまでほうっておくか」と軍医におこられたので気の毒に思いました。

入院は十七年の六月中旬、胸膜から肺浸潤になって、その年は退院させられなかった。浙贛作戦では負傷者や

病人が多かったので、南昌―九江―武昌から六キロほど山手へはいった立派な病院（武漢大学）へ行って治療を受け、十八年になってから退院しました。

―その後の作戦ですが、樁兵団（第三十四師団）はどうしてましたか。また、湘桂作戦が開始されるわけですが。

樁部隊（工兵第三十四連隊）は、ずっと南昌へ固定していた。十八年には小作戦、物資徴集とかありました。洞庭湖の江南殲滅作戦の時は、昭和十八年に来た初年兵の特別教育隊（体の弱い兵隊）で教育助手をしていて、留守部隊勤務だった。多分、私も退院したばかりで、そういう命令が出たのでしよう。

湘桂作戦の話をしましょう。部隊は昭和十九年四月二十七、八日、南昌を全部引きはらって出発した。出発前、全員が爪を切ったり、髪を切って遺骨の代わりにしたり、私物は全部整理した。ここへは帰ってこない、というので、今度の作戦はきびしい作戦だと思った。

これまでは、こういうことはなかった。樁部隊の後は、征部隊（独立歩兵第七旅団）に申し送って出発した。約

半月の行軍で揚子江岸の大冶に着いて四・五日大冶から岳州へ向け出発、くだって蒲圻のところに橋がなくて、（鉄橋の跡はあった）漕舟で部隊を渡河させた。さらにくだって新墻河へ着いた。

―新墻河が日本軍の第一線、日支両軍勢力の境界ですね。これからがいよいよ戦闘開始ですが、雨はどうでしたか。

それからがえらかった。雨ばかりだったので、新墻河に渡った時は雨はふっておらず、抵抗も散発的だった。夜が明けて、粵漢鉄道の軌道近くを南下して、その日の夕刻、東寄りに向きをかえて幕風山へはいていたが、その時はひどい雨でした。

工兵には馬があるが、その時、工兵は歩兵部隊へ各小隊を配属された。私等は第二百十六連隊の先兵と一緒に進んで山のなかへはいっていった。山路は獣道のような細い道です。そこを一個師団通すのでみちをひろげる。

歩兵隊にも砲（連隊・大隊）があるので駄載している。それを通すため拡幅作業するのだが、一個分隊が、分隊長の命令で七、八人が局所々々を作業する。真暗闇のな

かほとんど明かりはつけられない。夜通し拡張作業に追われた。

— 駄載馬で細い山路を越すのは大変だ。とくに雨で、夜での作業は並大抵でないが、山越えの状況を話して下さい。

重量の重い馬が路肩をふみはずす。日本馬は足幅が広い(支那馬はせまい)。乗馬や機関銃馬とは違う。砲身をのせる馬はとくにゴツイ。馬が谷底へおちると、歩兵はロープがないので、工兵がロープを立木に結んで砲を引き揚げる。馬は負傷して助からなかった。兵器機材、砲身や車輪等はなに一つ足らなくても砲にならないから、工兵も歩兵と一緒に引き揚げの作業をする。

しかし、兵隊にとって馬は戦友と同じだ。手塩にかけて、声一つかけたらわかるような馬が負傷して、引き上げられないからといって殺せない。馬のたて髪切って持って行く、可哀想な場面もありました。馭者はうすぐまって歩こうとしない。

幕風山をこえるのは、距離はたいしてなくても、昼間は樹木があれば動けるが、ないところは空襲のため動け

ないので夜行動する。その山をこえるのに四〜五日かかった。

山をおりて平野部の湖南省は風景が内地と同じだった。稲の早苗が風に波打って、ここが戦場かと思う時もあった。天気がよくなったが、四〜五日の長雨で、小路を一個師団通るのだから皆泥濘で、馬が通ると膝まではいってしまふ。そこで兵隊はわざと田圃のなかを歩いた。その方が脚がなかまではいらぬ。

ぬかるみのなか、三〜四日で汨水河原に出たが、もう朝方だった。その河原に便衣(中国の服)の日本兵の密偵(諜報隊員かと思う)の死体が二つうえを向いて寝かされていた。

死体の両手・両足は八番線できつくしばられ、耳から耳へも八番線が通されていた。胸には日本兵の認識票が、紐でわざと表示してある。首にかけ胸のところここれ見よがしにつけてあった。中国兵がしたのでしよう。死体のようすからみると、多分死後三〜四日経過したか、紫色に変色していた。からだにガスが充満して、太さが二〜三倍にふくれあがって、死臭が鼻をついた。

—悲惨なもので、特務機関の人たちは、その戦死の状況もわからぬまま、闇から闇へほうむりさらされてしまふことが多いようです。

これから、いよいよ第三次長沙攻略にかかるわけですね。

河の対岸は新市です。汨水の深さは一メートル〜五十センチ、肩ぐらいなので着のみ着のまま渡河しました。中支も六月上旬だったから、暑いときで、真夏と同じだった。

新市で、はじめて樁兵団はこれから長沙の岳麓山要塞を攻略すると聞かされた。それから雨がふったりやんだり、雨ふりには行軍した。米空軍は雨がふれば休みというので。だから、天気なら日本軍は昼は休めるが、雨がふると昼夜とも休めない、寝るところもないから。

その時点で、歩兵第二百十七連隊は、達磨山にかなり敵がいるというので山を攻撃したが、私たちの第二百十八連隊は湘江遡航部隊となり、一個大隊は陸路、他は舟で啓開発しながら、敵の退路遮断が任務だから、私等師団工兵隊が協力した。